意味と生活世界

Meaning and the Life-World

鎌田 勇

Kamada Isamu

This paper aims to clarify the signification of "meaning" in relation to the "life-world," which is propounded by Husserl. This concept, the life-world, has brought a new phase to phenomenology in the direction to overcome subjectivism. Schutz is one of the phenomenologists who developed their studies by utilizing this concept. Both Husserl and Schutz consider meaning to reside in the life-world. However, the life-world is perceptual for Husserl, while it is social for Schutz. Schutz position comes close to Gadmer's hermeneutics, which is also a development of phenomenology, and to Wittgenstein's linguistic philosophy. Comparing these perspectives, this paper shows that meaning is not subjective but social and that the world comprises human social action.

1. フッサール現象学と生活世界

フッサールは末期の著作に於てそれまでの超越的意味の構成から、歴史的知識の構成の問題へと彼の関心領域を広げた。彼はそうすることで時代が当面していた「非合理」の問題と対決するつもりでいたのだ。2つの世界大戦の狭間で、人類の大量抹殺、大恐慌、全体主義の勃興等、西欧近代文明の価値の崩壊の危機を目のあたりにして、西欧近代を生み出して来た理性主義に疑問符が付され始めていた。フッサールはこうした状況は近代理性主義そのものでなくその歪曲によると論じる。すなわち、「自然主義」、「客観主義」あるいは「実証主義」によって数学的に抽出された理念の世界が、「われわれの日常的な生活世界に、すなわちそれだけが唯一現実的な世界であり、現実の知覚によって与えられ、そのつど経験され、また経験されうる世界であるところの生活世界に、すりかえられた」(Husserl, 1962, pp. 48-9)。その結果、科学が生活から遊離し意味の基盤としての生活世界が忘れ去られ、生活世界の意味が空洞化した。換言すれば、これは理性の「疎外」である。

フッサールは科学は包括的生活世界に含まれる一つの文化に過ぎず、科学の「客観化」の方法も前科学的経験に基づくと論じる。これを明らかにするために根元的世界経験にまで「退行的」に探索する必要があるとする。そうすることによりブラック・ボックス化している科学の意味と世界の根元的存在の意味を明かにすることができるというのである。

フッサールの現象学は当初から理性の問題に深く関わってき、それはカントの「純粋理性批判」批判と呼ぶうるものであった。カントは超越的主観性、すなわち個人の内にあつ

て個人を越える純粋理性、すなわち論理及び範疇、がわれわれの認識の、世界の、構成的枠組であるとした。世界の客観性の基盤をこのように主観に置くことで、カントは主・客観のそして人間・世界の関係の「コペルニクス的転換」をしたと言われる。そこに於て、各個人は等しくユニバースの構成者たる純粋理性の所有者として、ユニバースの中心、あるいは小宇宙の所有者、ということになったのである。この考え方は啓蒙思想の運動を通し、個人の価値と平等の尊守という理念に基づく個人主義そして民主主義へと結実するのである。一方、主観の行為である科学の活動も、個人の思考を越える、思考の規範である論理、純粋理性に基づくが故に主観を越えた客観性を有するとした。かくしてカントは個人の尊厳と科学の客観性という近代の二つの原理を確立したのであった。

フッサールはこのカント理性主義のもたらした価値を決して疑っていなかった。しかし理性をア・プリオリな所与とすることに満足しなかった。デカルトに始まりヒュームら経験主義者が掘り下げた存在・認識の近代懐疑論に対するカント的解決を十分とは見なさなかったのである。何の前提も持たない究極の根源から出発する第一哲学を目指して、理性の起源を明らかにすることを彼の現象学の課題とした。そしてカントが『純粋理性批判』に於てそれ自体は意味を持たず純粋理性に基づく知的判断によって意味を与えられるとした感性経験、知覚、に、フッサールは意味の発生、理性の起源を求めたのだ。すなわち、知性が何らかの作業をする以前の直接経験（Erlebnis: 体験）をあるがままに記述することで、意味の原初の発生を捉える、そうした現象学によって純粋理性を更に基礎づけようとしたのである⁽¹⁾。このようなフッサールの現象学は、意味を心理的構成に帰すイギリス観念論、感覚主義的経験論(empiricism)に対し、直接経験に意味を求める経験論(experientialism)と呼ぶことができよう。

そのフッサールが時代の非合理に直面してそれを客観主義による理性の疎外とし対決しようとした。しかしこれは理性主義を基礎づけようとし、客観主義を批判してきたフッサール現象学の延長線上にある。また生活世界概念もその必然的發展であった。

ガダマーはフッサールのこの生活世界概念について次のようにいう。

「この新しい語、生活世界、は哲学者によってもたされ平常の言語に広く受け入れられた数少ない語の一つであるが、非常に広い意味を持っており、当時支配的だった新カント主義と実証主義に対抗するフッサールの思考の特徴を極めてよく表している。それは哲学の責務を科学の基礎に留めず毎日の経験の広い分野へと広げる」(Gadamer, 1987, P. 147)。

ガダマーはこの生活世界の概念がフッサール哲学の根本的方向を変えるものではなかったという。すなわち、超越論的自我を置き換えるべく意図されたのではなく、むしろ超越論的環を完全なものとするためのものであったとする。

にもかかわらずこの生活世界の記述はフッサールの超越的思考の枠組みを壊す契機となり、多くの学者はこの概念をフッサールのデカルト主義、第一哲学の確立及び独我論、から逸脱するために用いた、とガダマーは指摘する(ibid., pp. 133; 148)。

ランドグレーベも同様にフッサールのこの概念による新たな思考の展開は超越的主観主義の反歴史的アプリオリズムの破綻から逃れ出る可能な道を含んでいたと論じる(Landgrebe, 1981, p. 68)。かくしてフッサールの探求の発展そして時代状況への対応として提起された生活世界概念は、現象学の新たな可能性の展開の道、それは間主観性・歴

史・社会・文化といった問題を扱ういわば社会学的方向であるが、それを開いたのである。

シュッツはこの現象学と社会学の接点で「現象学的社会学」を発展させたのであるが、彼はフッサールが生活世界概念を提起する以前に既に現象学を社会学に導入しようと努力していた。ヴェーバーの理解社会学の方法論を現象学によってより厳格なものに洗練しようとしたのである。しかしそこにはヴェーバーから引き継いだ多くの問題を見いだされる。生活世界概念はこうした問題の克服を可能にすると共に、「意味」をめぐる、シュッツの現象学的社会学をガダマー解釈学とヴィトゲンシュタイン言語哲学に極めて近い立場へともたらしことになる。それを以下の論述でみていくことにしよう。

2. シュッツと理解社会学

ヴェーバーは個人の行為の意味の理解がその集合としての社会変動の説明に不可欠であると考えた。そして行為者自身の「主観的に思念された意味」と結び付いた行動のみを行為と呼ぶ(Weber, 1968, p. 7)。シュッツは彼の現象学的社会学は行為者自身の意味付与行為、すなわち己の行動の解釈、を動機と意図とに於て明からしめることを目指すという(Schutz, 1971, p. 6)。このようにヴェーバーもシュッツも共に主観的意味の把握が彼らの社会学の直接的目的であるとした。ヴェーバーはそれを可能にする科学の客観的方法として類型化を提唱し、シュッツも基本的にそれを受け入れる。しかし彼はヴェーバーの主観・客観の区別が不十分であるとし、現象学を導入することでより厳格な主観性の定義とその主観性を把握する方法としての類型化の精緻化を計った。すなわち、「現象学的エポケー」と呼ばれる態度の変容により、研究者の主観が研究対象に持ち込まれるのを徹底して排除し、その結果現れる対象、この場合行為者の主観的経験、を記述するのである。ヴェーバー同様シュッツにとって他者の主観は基本的に知り得ないのであり、したがってシュッツは日常生活に於ける常識とは全く異なる態度が必要になるという。常識的判断をすべて中止し、あるがままの対象を捉えなければならない。そしてその記述に於て用いられる類型化が科学の客観性を保証するというのである。このため社会学者は先ず行為者の社会的世界から己を切り離さなければならない。ここに於て「理論化している自己は社会的環境を持たず社会的関係の外にあって孤立している(Schutz, 1971, p. 253)。こうした訓練を受けた科学者が集散的に知識の集積を形成し、それに基づいて行為者の主観を類推しようというわけである。

このような立場はしかしフッサールの『危機』論文（『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』）の議論とは矛盾するのである。フッサールは科学がその意味の起源としての生活世界を忘れ去っていることを批判する。彼は科学の観念化された対象・概念・方法・妥当性がわれわれの生活世界での自然的態度による直接経験から引き出されたものであること、そして科学の本質直感はわれわれの日常生活のそれと何ら変わるものでないことを指摘する。

「科学的探求に於て直感的に与えられる周囲世界、この単に主観的な世界、が忘れ去られているが故にこの作業をしている主体が忘れ去られる。すなわち、科学者自身が研究の主題となることがないのだ」(Husserl, 1962, p. 343)。

科学する主体を知る必要があるのは、科学の対象・知識が科学者の「主観性」、すなわ

ち方法と視点、によってその組成を構成されており、この主観性を正確に理解することによりそれを括弧で括り、対象そのものを把握する、というだけでない。むしろこれは『危機』論文以前のフッサールの態度であって、『危機』に於ては「主観性」の理解がその科学の理解に不可欠であり、そして科学がいかに関生活世界における経験に基づいているかを示すことで、生活世界の意味の回復の必要性を訴えたのだ。ここに於て「主観性」とは個人の自我ではなく、科学者の共同主観である。

『危機』論文におけるフッサールにとって現象学的エポケーはむしろわれわれをすべての「客観的・科学的」知識から解放するのである(ibid., p. 150)。シュッツの方法は主観的の意味を明かにするといいつつ、社会科学者の客観的パラダイムの意味を置いているに過ぎない。むしろ、シュッツの主観・客観の区別が問題にされなければならない。

フッサールにとって主観的経験とは事象の知覚経験、すなわち知覚に現れる事物の把握であり、「客観的」事物の存在とはこの主観経験に基づく「客観的」思考による措置にすぎない。現象学的エポケーは客観的思考・知識から事象そのもの、原初的主観経験、を取り戻すのに必要なのである。意味はこのレベルの経験に内在している。一方、シュッツは思考による経験の「解釈」を、それはフッサールが客観化作用と見なしたものであるが、「主観的」と呼ぶ。彼は経験が意味を持っているというのは誤りであるという。意味は経験の内には無く、むしろ「経験は反省的に把握されてのみ意味を持つ」(Schutz, 1974, p. 94)。「意味はわれわれの意識の流れの内に生じる経験に内在する特質ではなく、反省的態度で見られた過去の経験の解釈の結果なのである」(Schutz, 1971, p. 210)。

フッサールにとって生活世界は知覚から成り、あらゆる知識に先立ちそれに基礎を与えるのが知覚経験である。生活世界は「感覚の、感性直感の世界、現れ出るものの感性的世界、である」(Husserl, 1962, p. 108)。「世界のその総体における存在は判断行為の結果でなくすべての判断の前提を形成するのである」(Husserl, 1948, p. 25)。現象学とはこの未だ観念化されていない生活世界での原初の経験への還帰である。

フッサールとシュッツのこのような違いはどのようにして生じたのであろうか。それはシュッツがヴェーバー理解社会学から受け継いだ新カント主義による。ヴェーバーは新カント主義ベイデン学派に属し、理性による世界構成という理性主義、知的判断・意志による行為の決定という主知主義・主意主義、範疇に基づく客観性の構成といった思考法をその社会学方法論に色濃く反映させていた。シュッツはヴェーバー理解社会学を、その内にあってフッサールが厳しく批判していた新カント哲学と対決することなく、現象学の方法と統合しようとしたのである。ここにシュッツ社会学がフッサール現象学から離れてしまった原因が求められる。

3. シュッツとガダマー解釈学

現象学にとって転機となった生活世界概念はまた、シュッツ社会学にも転機をもたらしたと言えよう。シュッツはフッサールが間主観性の構成の問題を解決できなかったと感じていた⁽²⁾。生活世界概念はシュッツに、間主観性がいかに可能になるかという問題を論ずるのでなく、それを出発点とすることを可能にしたのだ。同時にそれはシュッツの理解・解釈方法論にみられた主観主義と独我論からの脱却の道を用意した。

シュッツは生活世界を「日常生活の世界」、すなわち「われわれ生まれるずっと以前から存在し、他者、先達者達によって組織された世界として経験、解釈され続けた間主観的世界」と定義する(Schutz, 1970, p. 72)。この世界を与えられたわれわれはそれを親、教師、あるいは共同体の他のメンバーによって授けられた知識に基づいて解釈する。シュッツ社会学の目的はこの共同体のメンバーによる常識に基づく解釈から成る世俗的現実を明確化することであるという。

シュッツはフッサールに従い生活世界が意味の起源であるとするが、意味が生きられた経験に於て構成されるとは考えない。彼は次のように言う。「私の世界の知識の大変小さい部分のみが私的経験に発する。大部分は社会的に引き出され私に与えられる」(Schutz, 1971, p. 13)。意味と知識は社会的に構成され伝授され常識として蓄積される。社会のメンバーはその常識を通して世界と彼らにとっての現実を解釈に於て構成するのである。

個々で注目すべきことは「意味」を主観的過程、個人の解釈、には置いていず、解釈を可能にするいわば解釈図式、社会的に蓄積された知識に置いているということである。意味と理解の可能性、すなわち理性が社会に定位されたのだ。これは理性の超越性を、主観主義に於ては主観性に、客観主義に於ては物質間に、措定する理性主義に対する、歴史主義・社会学主義の立場の表明である。

歴史主義、社会学主義の思想家としてはまずディルタイそしてシェーラーの名を挙げることができる。ディルタイはカントに批判的でむしろヘーゲルの歴史精神の発展の考え方に好意的であった。彼にとって理性は「生」、それは歴史的・文化的人間の営為のすべてから成る、に住まう⁽³⁾。シェーラーは共同体精神に参加することで個人が個人になるとし、また知識は文化(価値)によって決定されているとして「知識社会学」を提唱した。

ディルタイの解釈学をハイデッガーの言語哲学に基づいて発展させたのがガダマーである。そしてガダマーの解釈学にシュッツの立場との共通性を見いだすことができる。ガダマーは、そこに於て意味と世界の両方が開明される解釈(理解)はその言語的本質により個人の経験を越えている、と論じる。解釈するということは解釈される当のものから距離を保ちある態度を取ることである。

「世界に対して態度を取るということは、自分自身を世界に於て出会ったものに対し自由を保ち、そのものを自分にあるがままに表すということを意味する」(Gadamer, 1960, p. 419)。

この距離の故に、何かあるものが特定の対象として己を切り離し、他者が理解する陳述の内容となるのである。彼は続けてこう言う。

「理解とは己を、過去と現在とが絶え間なく融合する伝統形成の過程に置くことである」(ibid., p. 273)。

経験を反省的に解釈するということは経験した事柄から距離を置くということに他ならない。この距離は伝授された社会的知識、すなわち貯蔵された知識の解釈への適用によって橋渡しされるのである。この社会的に与えられた知識による媒介が解釈を他者の理解可能なものになっている。シュッツの呼ぶ知識の貯蔵あるいは沈澱した知識は、ガダマーの呼ぶ「伝統」あるいは「先入観(見)」に、彼はそれをあらゆる解釈を可能にする前提と見なすのだが、あたる。

このように行為の意味が、行為者自身によっても過去のものとして距離を置き反省的に

解釈され、その際社会的に与えられた意味のコンテクストを用いることによってのみ把握されるのであるならば、それを「主観的」意味と呼ぶことの根拠は甚だ希薄になってざるを得ない。そこには他者が観察し意味を解釈する場合との差が見いだしえないのだ。すなわち、自己の行為の解釈と他者による解釈との間に質的差はないのであって、それをヴェーバーや前期シュッツのように主観的・客観的と区別することはできないことになる⁽⁴⁾。

ガダマーは「伝統形成過程に身を置き」「世界に対してある態度を取る」ということを「言語行為」と呼ぶ。つまり言語とは、人間特有の理解・解釈、すなわち伝統過程に身を置き周囲世界から距離を取るという「関係」に於て意味を把握する、ということである。生活世界は彼にとって言語世界ということになる。このように、意味は解釈の主観的過程の内にでなく言語の内にあるとすることで、行為の意味が他者にも明らかになりまた科学の対象にもなるのである。なぜなら、言語は本質的に個人の意識を越えているからである(Gadamer, 1987b, p. 151)。ガダマーは次のように言う。

「言語は理解がそこに於て実現するような普遍的媒介である。すべての理解は解釈であり、すべての解釈は対象が現れ出ることを可能にする言語の媒介に於て起きる」(Gadamer, 1960, p. 366)。したがって、「理解は主観の行為と考えられるべきではない」(ibid., p. 274)ということになる。

人間にとっての世界は動物にとっての環境世界とは違い、理解に於て現れ把握される、すなわち人間から一定の距離を保ち、この距離が人間に態度をとることを可能にするような全体的存在として定立されている言語世界である。この言語世界に於てのみ、意味は事物の、自己の、そして他者の在り方、関係を示すものとして理解の対象となるのだ。科学を含むあらゆる知識は、世界に対し態度をとる、視点を持つことにより可能になる。態度、視点に浸透した先入観、伝統、文化は、科学的理解にさえ不可欠の構成要素として入り込んでいるのである。

その意味ではすべての知識は文化に相対的であることを免れ難い。にもかかわらず、「世界」はこの知識の相対性を越え、それを包括する総体として普遍的なのである。それは世界の構成要素である言語が、如何なる視点に対しても「開いて」いるからである。したがって、この言語世界におけるわれわれの経験は常に無限の可能性を有しており、それは知識についても同様である(ibid., p. 423)。

シュッツの現象学的社会学が解釈学に近い立場に至ったというのは奇異なことではない。ディルタイはフッサールの現象学を高く評価していたが、その超越論主義を受け入れなかった。シェラー、ハイデッガーは共に指導的現象学者として知られていたが、フッサールの超越論的主観主義を批判して離れていった。ガダマーは同様にフッサールの超越論的主観主義を厳しく批判しつつ、現象学に学んだことは少なくないことを認めている。ここで言えることはこうしたハーメニウティスツは現象学を土台にして、しかし現象学的主観主義を越えるべく、彼らの解釈学を構築したということである。その意味では現象学の発展なのである。

彼らが現象学から学んだものは、直接経験に於て事象と意味が与えられるとする現象学的一元論であった。それが経験である限り人間的次元を持ち、決して物自体、即自の世界ではない。ハーメニウティスツは、フッサールが知覚と見なした直接経験を、知覚をも

内に含んだ理解・解釈と解する。事象・世界に浸透した超越論的主観性は、解釈を可能にする歴史的・文化的意味のコンテクスト、言語、に置き換えられた。こうすることでハーメニュティスツは客観主義と主観主義を同時に克服し、言語的・社会学的一元論を提起しているのである。これは単に知識社会学というだけでなく、言語・社会学的存在論というべきものである⁽⁵⁾。

シュッツは言語哲学の言語の視点を欠いていたが、彼の探求を生活世界の社会学と定義した後は上記解釈学の立場に極めて近づいたのである。彼は現象学と出会う前はヴェーバーリアンであったが、ヴェーバー理解社会学に影響を与えていたディルタイの（ヴェーバーはディルタイにしたがって「理解」を社会学の方法として定義した）解釈学をも引き継いでいたと言える。また当然シェーラーの知識社会学から影響を受けた。現象学の超越論的主観主義批判と生活世界概念を通し、彼本来の社会学の指向性に於て社会学的構成主義の道を開いた。バーガー・ルークマンの『現実の社会的構成』はこの方向での発展の一つの成果と言える。（社会学的存在論のレベルまでは到達していないが。）

見逃してならないことは、フッサール自身が脱理性主義、脱主観主義の道を開いたということである。彼はカント理性主義を基礎づけようとして、感性的経験に理性の発生を見た。結果的にそして意図的に理性主義の理性変調を批判したのだ。これは科学主義に対し感性の復権を訴えたロマン主義の運動、そして世界・自然との関係を含めた人間の行為・在り方全体を問題にした生の哲学と共通した方向であったのだ。一方、知性的主観主義と客観主義を越えるべくフッサールの訴えた事象そのもの、現象（フッサールはそれを感性経験と考えた）、への還帰は超越論的主観性さえ否定する契機を含んでいた。更に、科学を事象そのものの表現でなく主観的経験の客観化行為とすることで、知識の相対性（解釈学的循環）を示した。（『危機』論文では科学を文化と呼んでいる。）現象学のこうしたロマン主義、生の哲学、解釈学との接点で、シェーラーは知識社会学を、ハイデッガーは存在論を、ガダマーは解釈学を、サルトルは実存主義の行為論を、メルロ＝ポンティは身体論をそれぞれ展開した。シュッツの現象学的社会学もこうした現象学の発展の間において、一つの可能性の追求であったといえよう。

4. ヴィトゲンシュタインの言語哲学

ガダマー解釈学と多くの共通性を持つヴィトゲンシュタインの言語哲学はまた、シュッツの立場とも類似した議論をしている。言語哲学を解釈学とシュッツ社会学と比較することで、これまでフッサール現象学からシュッツ社会学と解釈学への発展を見る過程で検討されてきた、「意味」と「（生活）世界」の関係及び「理性」と「主観」の問題の更なる追求が可能になろう。

現象学とヴィトゲンシュタインの関係については色々論じられているが（黒田、1975；Gier, 1982；Hintikka, 1989；等）、ヴィトゲンシュタインの後期哲学は現象学に対するアンチテーゼとしてたてられた、あるいは少なくともその意味は持つことは指摘されよう。『哲学探求』の内に次のような一節を見つけることができる。

「§ 436 すばやく把えることの困難な現象、すばやく滑りぬけていく現在の経験、あるいはそれに類するものこそ、われわれによって記述さるべきものである、ということのう

ちに課題のむずかしさがあるのだ、とひとが信じてしまう場所、かの哲学することの袋小路、これに入りこんでしまうことは、ここでは容易である。そこでは、通常の言語がわれわれにとってあまりにも削けずりに見え、あたかもわれわれの相手にすべきものが、日常語っている現象でなくて、『容易に消え失せてしまうような現象……』であるかのようにみえてしまう」(Wittgenstein, 1953)。

長く引用したが、ヴィトゲンシュタインの現象学の理解と批判を明確に示していると思える。過ぎる刹那の生きられた経験に意味はなく、反省的把握・解釈に於てのみ意味があるとしたシュツとも似た認識である。そして「日常語っている現象」こそ研究対象であるとするヴィトゲンシュタインは、日常生活の活動をその社会学の対象にしたシュツとここでも認識が一致するのである。

ヴィトゲンシュタインは私的言語という考え方に反対する(ibid., § § 243-370)。自分自身にしか分からない言語があるというのは全く馬鹿げている。なぜなら、言語はコミュニケーションを目的にしており、自分にしか分からないのであれば何のための言語であろう。もしそうしたものがあってもそれは公的言語を前提にしているのである(通常の語を自分のみの記号に翻訳する、等)。同様に、語の意味が私的経験そのものであるとするなら、どのようにして私的経験が公の語の意味となりうるのかという問題が生じてくる。ヴィトゲンシュタインは有名な「beetle」の例えをする。各人が持つ箱の中身はビートルと呼ばれているが、自分の箱の中は覗けても他人の箱の中は見えないとする。この場合、箱の中身はビートルという語の「意味」にはなり得ない。なぜなら、語の意味が各人で異なってくる可能性があるからであり、それは確認のしようがない。それでは語として機能しない⁽⁴⁾。

ヴィトゲンシュタインはこの例で、例えば「苦痛」といった身体感覚を指す語の意味が自己の苦痛経験ではないことを示そうとしているのである。経験が意味であるとするならば、その語は公共の使用に耐えない。しかしこれはわれわれの日常生活での理解と異なるように思えよう。「苦痛」という語を自分の苦痛経験から理解し、「痛い」と言う時は自分の苦痛を訴えるのだ。だが、ヴィトゲンシュタインは他者の苦痛を語るとき、自己の経験から類推するのであるならばそれはかえって困難なことだという(ibid., § 302)。

彼はむしろ苦痛に伴う行動に注目せよという。語を習得するとき、苦痛を表現する行動と結びつけて語を発語することを習う。すなわち、語は苦痛行動と結びついているのであり、苦痛を表現しているのだ。しかしそれは、語が苦痛行動を指している、あるいは意味しているということにはならない。語は体験される苦痛を指示しているのだが、それは語の意味ではない。語の意味はその使用のコンテクスによって変わる。例えば「彼はひどい痛みを苦しんでいる」と言う場合、この文の意味は彼の体験している苦痛そのものでなく、その様子なのだ。

ではどのようにして公の語が観察可能な行動を越え体験を指示することができるのか。それは語の機能なのである。行動が起き、コミュニケーションがあり、語が用いられるそうした場面全体、それをヴィトゲンシュタインは「言語ゲーム」と呼ぶのであるが、そこに於てゲームの一部として語はそのような機能を持つのだ。ちょうど、ある物に向けた指先がその物を指し示す機能を有するように。だが、語は目に見えないものをも示しうる。それが語の使用と指さし行為との差であるわけだが、言語とは指さし行動のよう

な単純な行動の組合せから発展したコミュニケーションの手段であり、複雑な機能を有しているのである。子供の言語の習得は言語ゲームの仕方を習うのであり、語を正しく用いることは言語ゲームの一環である。

ヴィトゲンシュタインの、世界が「主観的経験」から構成されているという主張に対する議論を、再び少し長いが引用してみよう。

「知っているすべての物を見、世界が個人的な経験に依存していると言っている時、それらのものが価値、信頼性そして堅固さを失うように見える。そしてわれわれはそれはすべて『主観的』だと言いがちだ。そして『主観的』とは蔑称として、例えば意見は単に主観的だ、趣味の問題だ、と言う時のように用いられる。こうした面が経験と知識の権威を揺さぶるようにみえるということは、言語が誤った類推を招くという事実を示している。これは、大衆科学者が電子からできているのだからわれわれが立っている床が実際は堅固ではないと言ったかのように思われる、そのようなケースを思い起こさせよう」

(Wittgenstein, 1958, p. 48)。

「主観的」も「経験」もそれぞれそれなりの意味を持って使われている語であるが、誤用によって世界があたかも現実ではないかのように表現されてしまう。

ヴィトゲンシュタインは、哲学はこうした語の誤用を犯してきたのだという。文の主語である、いや主語でしかない「私」を「主体」としてあたかも実体であるかのように論じ扱ってきたのが主観主義の哲学者である。「意識」「主観」「心」にしても同じで、物象化されてきたのである。「主観性」「他我」「存在」といった諸々の形而上学の問題、懐疑論、二元論等は哲学が自ら造り出してきた謎であって、行き止まりの迷路の中でのたうってきたのが近代形而上学である。こうした解くことが不可能に思える哲学的問題は、日常言語の平常用いられている語の意味の誤解と誤用から発している。したがって、ヴィトゲンシュタインにとって、哲学の（現在の）課題は日常言語の文法・用法を明確にすることで、こうした哲学的誤解から「意味」を、人々を、解放することである。換言すれば、それは、

「哲学者の謎を解くことで彼らの攻撃から常識を守ることである。すなわち、彼らが常識を攻撃したくなる誘惑を治してやることによってである」(ibid., p. 58-9)。

これは哲学のディコンストラクション、日常言語への解体である。

言語とは、したがって、哲学者が初めて掘り起こすことができるような沈澱した意味の集合体ではなく、また「構造」として化石化した規則の標本でもない。それは日常的、自然なコミュニケーションであり、言語を支えているのは人間の相互行為であると共に、言語そのものが行為なのである。「意味」は語に於て表現されているのだが、それは直感の対象になるような抽象的客体でも物自体でもない。意味はコンテクストに依存する。語の使い方を指すのであり、最終的には行為に行き着く。

行為はそれが社会的行為である限り（人間行為は常に直接的、間接的に他者との関わり）に於てなされ、その意味ではすべて社会的行為である）規則を伴い、規則に従っている・いないと描写できる。しかし規則は行為の外にあってそれを拘束する、例えば主体の解釈・判断によって行為を制御する、といったものではない。それは実際の行為に於て明らかになる、そして行為に於て合意される、いわば行為の仕方である。語の用法、意味、文法も同様に解釈によって規定されることはない。

ここにガダマー及びシュッツとヴィトゲンシュタインの相違を見いだすことができる。前者にとって意味は解釈にあるのだが、後者にとってはそうではない。しかしガダマーとシュッツにとって解釈は共同体に蓄積した知識・伝統に基づくのであり、知識・伝統を実際の行為の仕方、言語の使用と解するなら、ヴィトゲンシュタインとの違いは大きくない。もっと重要な両者の相違は「解釈」の意味にある。ガダマーとシュッツは理解・解釈を思考と同じように心的行為として捉えている。言語・知識を通じ、共同体・社会によって浸透されており主観的とは言えないにしろ、結局のところ、それ自体が「行為」なのである。それに対し、ヴィトゲンシュタインは理解・解釈それ自体を行為であるとは見なさない。むしろ何かをすることができるということである。つまり、何かを理解した・解釈したということは、何らかの形でそれをやってみせることができるということである。何かができるということは、そう思うことでもそう宣言することでもなく、実際の行為を含意しているのである。

このように、ヴィトゲンシュタインの言語哲学に於ては意味も解釈も実際の行為（「心的」行為でなく観察可能な行為）、社会的行為へと収束するのである。意味、すなわち論理学の「対象」そして論理、思考の規則、つまりカントの純粋理性、は超越的存在とは見なされず、実際の行為へとディコンストラクトされているのである。

5. 結語

フッサールの現象学は意味論であり理性批判(critique)であった。意味は事物の間に存在する物理的客観でもまた知性による主観的構成物でもない。それは知覚、感性経験に現れる事象の構造である。この構造は感性的・超越論的主観が知性に先立ち、主体と周辺世界、事物との関係を把握・構成したものである。それは理性の感性への還元といえる。そしてこれは認識論による世界・存在の解明の企てであり、その意味ではデカルト以来の近代西欧哲学の主流の系譜に属する。認識論の帰結である主観主義そして独我論はフッサールをも苦しめ、彼の「生活世界」概念は科学主義批判と同時に独我論への一つの解答として提起されたといえよう。

認識の枠組みである理性が存在の枠組みでもあるとする認識論に基づく理性主義は、主観主義も客観主義も基礎づけてきた。フッサールの発生場としての現象への注意の喚起は、理性主義と認識論の優位性の崩壊を準備した。ハイデッガーは現象としての「世界」の先行性を示し、世界を開示する「理解」は言語にあるとして、その言語的存在論に於て理性主義、主観主義、そして認識論を克服しようとした。彼は近代形而上学をキリスト教的プラトン主義として、すなわち理性、主観といった観念の抽象的実体としての指定しているとして、を批判し(Heidegger, 1950)、言語に存在(の意味)の開示性を求める。

ヴィトゲンシュタインはハイデッガーとは異なる方向で、形而上学を言語哲学に於て解体する。ヴィトゲンシュタイン、ハイデッガー、そしてハイデッガーの思想を受け継ぐガダマーは共に客観主義、主観主義、そして理性主義を否定し、言語活動に「意味」と「世界」を見いだすのである。

シュッツは彼の現象学的社会学を間主観の活動場としての生活世界の記述と定義し、これら哲学者が示唆する道に極めて近い社会学の方向を開いた。エスノメソドロジーはこ

の方向での発展を示している。

ガーフィンケルはシュッツの日常生活の場への関心、とりわけ直接的コミュニケーションに於て行為者が共通の現実を共に構成する、あるいは意味を相互理解の要として構成・把握する過程、を社会的現実・社会生活を構成する最小の単位、しかし最も直接的且つ真なる社会過程、として捉える見方に注目した。ガーフィンケルにとって意味の理解は思考による解釈ではなく行為者間の行為の交換、他者の行為に対する反応の仕方であるのだ。これは基本的にヴィトゲンシュタインの議論と同じである。エスノメソドロジーは生活世界、成員間の行為の連関、連鎖に於て構成される意味、構造化される関係をその研究の対象とすることで、構造を客観的事実として行為の外から導入する客観主義と不可知の主観を前提にする主観主義を共に越える新たな社会学を提唱している。

また一方、生活世界を知覚世界とするフッサールの現象学を発展させかつその主観主義を克服しようとした現象学者として、メルロ＝ポンティの名を挙げることができる。本稿ではとり扱うことはできなかったが、彼の示したことも究極的には知覚と行為の相互関係である⁽⁷⁾。

ここでの議論で示されてきたことは、「意味」は「行為」の外から行為者自身、観察者、社会学者によって「主観的」にあるいは「客観的」に与えられるのではなく、行為に内在するものとして行為者、観察者に等しく把握しうるものである、ということだ。意味は行為に於て構造化される、行為者間のそして行為と状況の関係といった行為の行われる場面全体の関係を表している。「生活世界」とはこうした日常の行為の総体、行為とそれを包括する関係全体のことであり、「意味」はこの生活世界に発生し把握されるのである。

注

- (1) Husserlは『経験と判断』で現象学を「論理一般の発生学」と呼んでいる(Husserl, 1948)。
- (2) Schutz, "The Problem of Transcendental Intersubjectivity in Husserl," in 1966 及びWagner 1984参照。
- (3) DiltheyはWeber, Heidegger, Simmel, Mannheim, Gadamer等広く影響を与えたが(Ermarth, 1978, p. 3)が、Husserlに対しても「生きられた経験」、「生活世界」の「生活(生)」概念に於てその影響がみられる。
- (4) 言語哲学者のRyleが同様の見方を提示している(Ryle, 1949)。
- (5) Gadamerにとって、人間存在を最も特徴づける「理解」に於てすべての存在物はその姿を現す。(「理解」が存在を構成するのではない。)理解が歴史・社会に基づくのであるなら、存在の理解は社会的にのみ可能ということになる。Gadamerの哲学的解釈学の知識社会学との統合の方向での発展が今後の課題になろう。Hekman, 1988参照。
- (6) 箱の中身を描写すれば良いという議論も出てこようが(例えばChihara & Fodor, 1966)、それは描写に用いる語の公共性(私的経験を越えていることを)前提にしているのだ。
- (7) 鎌田勇、「意味と行為」、西原和久編『シュッツと社会理論－現象学的社会学の展開』、青土社、1991(予定)参照。

参考文献

- Berger, P., Luckman, T., 1967, The Social Construction of Reality, Doubleday & Company.
- Chihara, C., & Fodor, K. A., 1966, "Operationism and Ordinary Language: A Critique of Wittgenstein," in Wittgenstein: The Philosophical Investigation, ed. Pitcher, G., Notre Dame University Press.
- Dilthey, Wilhelm, 1962, Gesammelte Schriften, Bd. I-VII, B. G. Teubner.
- Ermarth, Michael, 1978, Wilhelm Dilthey: The Critique of Historical Reason, The University of Chicago Press.
- Gadamer, Hans-Georg, 1987a, Gesammelte Werke, Bd. 2: Hermeneutik II, J. C. B. Mohr.
- , 1987b, Gesammelte Werke, Bd. 3: Neue Philosophie I, J. C. B. Mohr.
- , 1960, Wahrheit und Methode, J. C. B. Mohr.
- Garfinkel, Harold, 1967, Studies in Ethnomethodology, Prentice-Hall.
- Gier, Nicholas, 1981, Wittgenstein and Phenomenology, SUNY Press.
- Heidegger, Martin, 1960, Unterwegs zur Sprache, Neske.
- , 1953, Sein und Zeit, Max Niemeyer.
- , 1950, Holzwege, Vittorio Klosterman.
- Hekman, Susan, 1988, Hermeneutics and the Sociology of Knowledge, University of Notre Dame Press.
- Hintikka, J. & Hintikka, M., 1986, Investigating Wittgenstein, Basil Blackwell.
- Husserl, Edmund, 1962, Husserliana, VI, Martinus Nijhoff.
- , 1948, Erfahrung und Urteil, Classen & Goverts.
- 黒田亘、1975、『経験と言語』、東京大学出版会
- Landgrebe, Ludwig, 1981, The Phenomenology of Edmund Husserl, Cornell University Press.
- Ryle, Gilbert, 1949, The Concept of Mind, Barnes & Noble Books.
- Schutz, Alfred, 1974, Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt, Suhrkamp.
- , 1971, Collected Papers I, Martinus Nijhoff.
- , 1966, Collected Papers III, Martinus Nijhoff.
- , 1970, On Phenomenology and Social Relations, The University of Chicago Press.
- Wagner, Helmut, 1984, "The limitations of Phenomenology: Alfred Schutz's Critical Dialogue with Edmund Husserl," Husserl Studies 1, pp. 179-99.
- Weber, Max, 1921-22, Soziologische Grundbegriffe, J. C. B. Mohr. [阿閉、内藤訳、『社会学の基礎概念』、角川文庫、1975]
- Wittgenstein, Ludwig, 1953, Philosophische Untersuchungen, Basil Blackwell. [藤本隆志訳、『哲学探求』、大修館書店、1975]
- , 1958, The Blue and Brown Books, Harper & Row.